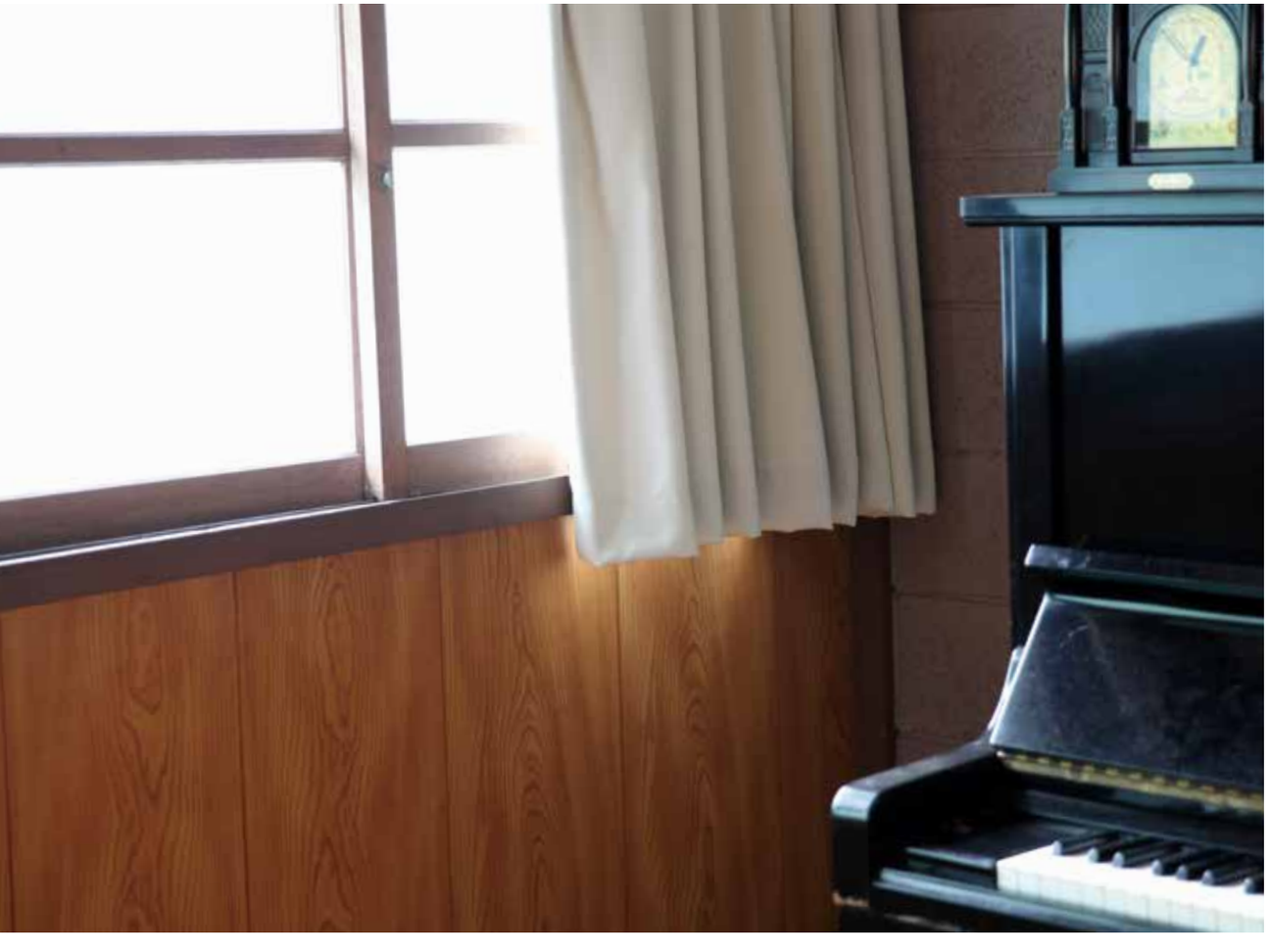
拝啓、小澤征爾様

昭和三十年代に、長野原町の北軽井沢小学校（旧第三小学校）に通っていた私は、小澤さんを見ています。地元のお父さんたちがボランティアで積み上げた小学校の校庭の石垣に寝そべっていました。いつも同じ場所で、空を見ているのか、寝ているのか。少し汚い格好をしたお兄さんです。ある日、そのお兄さんは、私たちのために楽団と一緒に音楽を聴かせてくれました。

夏が終わればどこへ消えたのか、
あのお兄さん、お姉さんたちは
私たちの記憶から消え去り、厳
しい冬の生活が始まります。

連綿と続く生命の輝き。私は、浅間高原を飛び出し、都会暮らしを経て、ふるさと北軽に帰り六十五歳になります。せめて心の中では、生命のみずみずしい輝きを持ち続けたいと念ずるようになりました。

小学校の石垣の上で寝ころんでいたお兄さんが小澤さんだったと知ったのはずっと後のこと。開拓農家の小倅だった私の家にテレビが入ったのが小学校四年生（昭和三十六年頃）のとき。その後、日本中でクラッシック音楽ブームがあったのでしょうか。N響のオーケストラ公演が頻繁にテレビ放送されていました。



そんな折、夕食後の父母の何気ない会話には、小澤さんの事が含まれておりました。かつて小澤さんが斎藤秀雄さんの指導の下、北軽井沢で厳しい研鑽を積まれたこと、小澤さんがヨーロッパ、否、世界で有名になったこと。北軽井沢（私たち）には、小澤征爾がいること。

あっそうか。あの石垣に寝ころんで空を見ていたお兄さんは小澤征爾だ。私の記憶に残った名も知らない人の正体は、小澤征爾、その人でした。

浅間高原の自然は厳しくも美しいです。私たちに無数の喜びを与え、森に入れば嫌なことを忘れさせてくれます。今も変わらず、あの時の自然があります。

人と人が直接向き合う関係は、時に美しくもあり、醜い争いのときもあります。でも、自然の中では見つめ合おうが、そっぽを向いていようが、離れていようが、互いの息づかいを感じることができます。自然は大きく、また多様であり、人間はちっぽけな存在であるからこそ、自然の中の互いの関係は懐かしい、どこか本来の自分を見つけられる魔法に満ちているのです。森の中でわきあがる笑みは、ナチュラルな関係の源泉だと思います。

ふるさと北軽に再び帰り、それ
からおよそ四半世紀が過ぎ、

いろいろありましたが、山河に
変わりなく、森はいつもどおり
に佇んでいます。そして漠然と、

「子供たちの瞳にはどんな未来が映っているのだろうか？」と、ふとそんなことが頭をよぎった時、小澤さんに聞いてみたくなったのです。

小澤さんと自然はどんな関係にあるのだろうか？　小澤さんにとって北軽井沢は、今でも懐かしいところなのだろうか？　と。

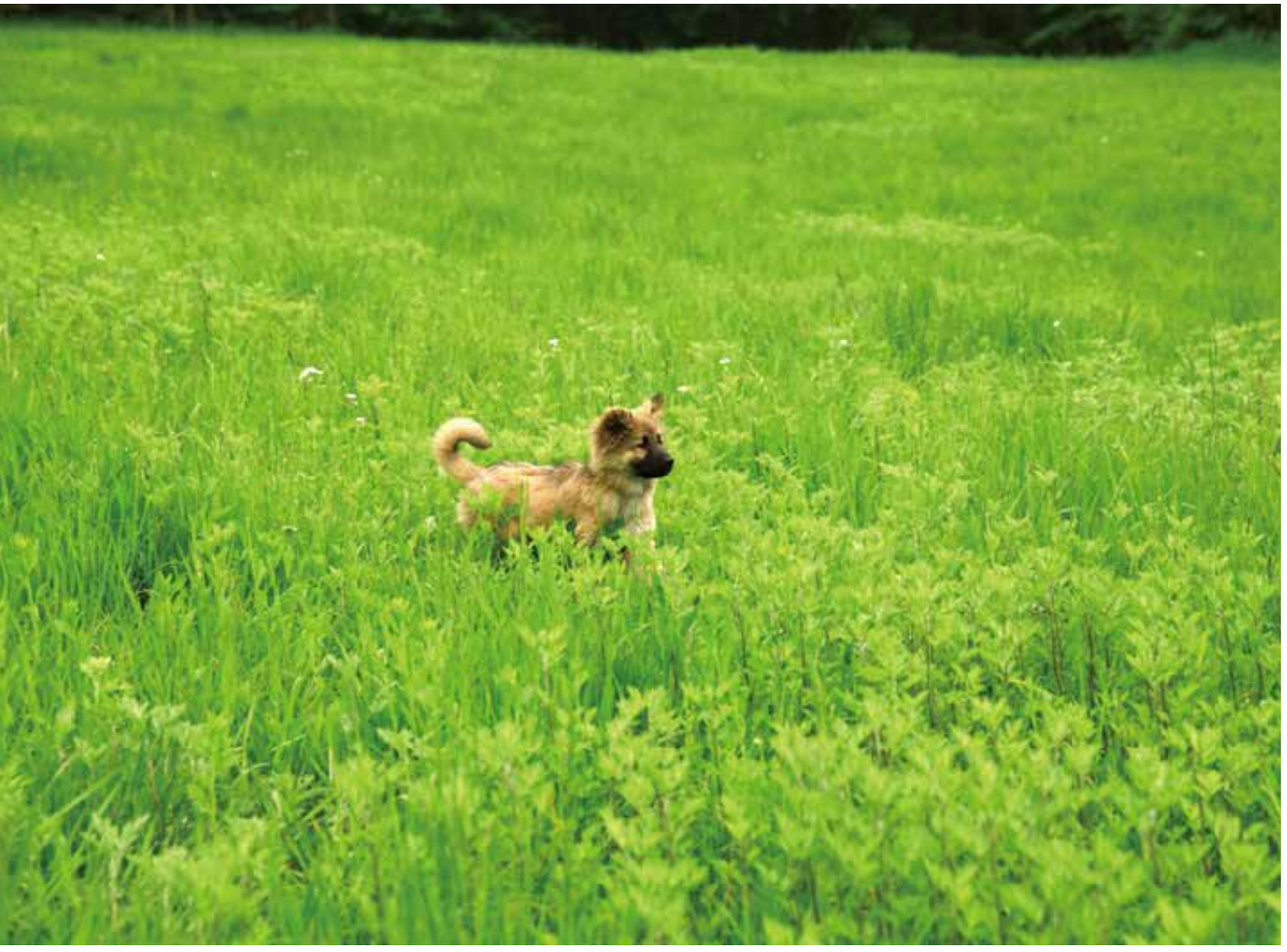
私の母は今年八十八歳になります。一人暮らしですが毎日森の中を歩いています。口ぐせのように「もう十分生きたからいつ死んでもいい」とつぶやきながら「でも今日でなくてもいい」「あの新緑をもう一度見たい」「ハッとする紅葉を見るためにそれまでは死ねない」と、ぶつぶつと欲を張ります。

北軽井沢の四季を知る者にとっては、よくわかる気持ちです。

北軽井沢ミュージックホールは、昔のままの残っています。斎藤先生のピアノや古びた譜面台があります。地元の仲間たちは、ミュージックホールサポーターズを組織し、ホールからの発信を続けています。

古い譜面台にはキズがあります。斎藤先生が腹を立てて怒った時に作ったキズだとか、いやいや若き小澤さんが乱暴に叩いた跡だとか、まことしやかに会話されています。

斎藤秀雄先生のもと、北軽井沢の山荘に集まった若き音楽家たち。そこから、ミュージックホール建設の歴史が始まります。小澤さんがミュージックホールの財団理事長を引き受け、若き音楽家の育成に尽力されたこと。地元では知られた話ですが少しずつ忘れ去られてきました。私たちミュージックホールサポーターズにとって、ずっと語り継ぐ宝ものです。



最近、年をとってゆくのも面白いものだと知りました。そうはいっても、勝手気ままに草原を走り回る若い活力はまぶしいものです。

北軽井沢から世界に飛び出した小澤さんがいて、いっぽう私たちは何やかやと世俗にまみれ、日一日が過ぎ去る毎日です。それでも自然を愛し、噴煙の立ち上る浅間山の麓で生きています。

いつの日か、音楽の世界に生きる小澤さんの自然観を聞いてみたい。

願わくば、一日、いや半日でもいいんです。小澤さんと私たちの思いを重ねる時間をいただきたいのです。

小澤さん、もう一度、北軽井沢
にいらっしゃいませんか。

ミュージックホールサポーターズの仲間たち、フリーペーパーの編集委員、地域の仲間たちを代表して、望外のお願いと知りながら手紙を書かせていただきました。

敬具

若き音楽家たちを育んだ山の音楽堂のこと。

北軽井沢交差点のほど近くに建つ、一見すると木造の平屋のようなレトロな建物。看板さえなければ、ここが音楽ホールだとは気づかないかもしれません。ましてや、ここ「北軽井沢ミュージックホール」が日本で初めての音楽を学ぶ学生のための合宿施設であったこと。また、小澤征爾さんをはじめとする若き音楽家たちが北軽井沢から巣立っていったという歴史を知るひとも、少しずつ少なくなりつつあります。

日本のチェロ奏者・指揮者の草分け的存在であり、戦後は音楽教育家として多くのクラシック演奏者や指揮者を育てた故・斎藤秀雄先生。昭和30年代、桐朋学園に音楽科をつくり、子どものための音楽教育に力を注いでいた斎藤先生は、夏の間、北軽井沢にある山荘に子どもたちを集め、特訓を行いました。参加する生徒が多くなったため、合宿は北軽井沢小学校の教室を借りて行われるように。その合宿に参加していたのが、斎藤先生の門下生で、まだ二十歳の頃の小澤征爾さんでした。地元のひとは当時の合宿の様子と小澤さんのことを、懐かしく振り返ります。

「学校は夏休みでしたが、当番の日には練習風景をよく覗きに行きました。子どもたちとはいえ立派な演奏でね。休憩時間、薪棚の上に寝転がっている学生がいたからコラっと叱ったら、それが小澤さんでした。ちょっとキザっていうのかな、他の生徒とは違う雰囲気がありましたね」（元小学校教員のAさん）

「当時はまだ学生さんたちは草軽鉄道で北軽にやってきていました。学生たちのグループは賑やかで、そのなかでも、線路にひょいっと降りてみたり、いちばんふざけていた男の子が、小澤さんだったよ！」（元駅員のKさん）

《世界のマエストロ》もこの頃はまだ、将来に夢と不安を抱く、ひとりの無名の青年でしかありませんでした。

まもなく小澤さんは世界へと旅立ちますが、北軽井沢での斎藤先生と学生たちの音楽合宿はその後ますます盛んになっていきます。小学校での練習も手狭になった頃、斎藤先生の教え子の両親、田中テルさん泰雄さん夫妻が「ここに学生たちの本格的な練習施設をつくってください」と、北軽井沢に所有する土地を提供することを申し出ます。夫妻は、土地を寄付するだけでなく、資金の調達や財団法人の設立、運営や管理に奔走し、昭和42年から4年間をかけて、大ホールのある日本で初めての本格的な合宿施設「北軽井沢ミュージックホール」が完成。すでにヨーロッパでのデビューを遂げていた小澤さんも、チャリティーコンサートを開いてホール設立に協力したほか、斎藤先生が亡くなられてからはホールの財団理事長を務めました。完成後のホールは、桐朋学園だけでなく東大・農工大・女子美大など多くの学生オーケストラが利用し、多い年には年間4千人もの学生が訪れました。

昭和58年、長野原町に寄付されて以降のホールは、夏のコンサートの場として存続してきましたが、建物の老朽化も進み、往時の賑わいは遠のいていきます。そこで立ち上がったのが、大島文子さん直子さん姉妹を中心としたかつての桐朋学園の卒業生。地元北軽井沢の有志のメンバーたちはボランティア団体「北軽井沢ミュージックホールサポーターズ」を結成し、建物修復のためのチャリティーコンサートや清掃活動を行い、町も改修事業に着手。平成19年のリニューアルオープンと同時に、8月の1ヶ月間、様々な音楽公演が開かれる「北軽井沢ミュージックホールフェスティバル」をスタート。夏の北軽井沢の恒例イベントとなっています。また、当時、学生たちの合宿の生活面をサポートしていた音楽愛好家によるボランティアグループの方々も、北軽井沢には特別な思いを持ち続け、今もこの地を訪れ、地元の人との交流を続けています。

日本屈指の指導者と、若い音楽家たちの情熱を支え続けてきた小さな〝山の音楽堂〟は、今年、創立50周年を迎えます。そしてあの日、小澤征爾さんが遠い世界を夢みながら見上げた北軽井沢の空は、今も変わることなくゆったりと、音楽堂からふたたび世界を目指す音楽が聴こえてくる日を待ち続けているようです。

＊この冊子は、２０１６年、松本でのサイトウキネンフェスティバル開催中に、小澤征爾さんのもとへ届けられた実際の手紙をもとに編集したものです。

北軽井沢ミュージックホール　略年表

1955（昭和30）年7月　斎藤秀雄氏率いる桐朋学園オーケストラが、北軽井沢小学校での夏期合宿を始める。

1964（昭和39）年9月　ミュージックホール設立の構想が始まる。

1965（昭和40）年～1966（昭和41）年　ミュージックホール設立のためのチャリティーコンサートが開かれる。1966年12月には、小澤征爾氏指揮、成城大学と立教大学との学生オーケストラコンサート。

1967（昭和42）年7月　第1期工事（分奏室4室、管理人室、応接室、調理室、浴室）が完成する。北軽井沢ミュージックホールに財団法人の認可が降りる。理事長は斎藤秀雄氏。

8月　ホールの使用を開始する。

1968（昭和43）年6月　第2期工事（大ホール）が完成する。

8月　北軽井沢ミュージックホールこけら落としを行う。桐朋学園オーケストラによる祝賀演奏会。指揮は斎藤秀雄氏の弟子、秋山和慶氏。

1969（昭和44）年4月　第3期工事（宿舎、調理室増設）が完成する。

1970（昭和45）年6月　第4期工事（食事室兼小ホール、分奏室、個人レッスン館）が完成する。

9月　桐朋オーケストラが初のヨーロッパ公演で大成功を納める。この公演のための合宿が北軽井沢ミュージックホールで行われた。

1974（昭和49）年9月　斎藤秀雄氏、逝去。享年72歳。

1983（昭和58）年1月　財団法人北軽井沢ミュージックホール（理事長・小澤征爾氏）より、長野原町へ施設（土地・建物等）が寄贈される。

4月　長野原町営北軽井沢ミュージックホールの運営を開始する。

7月　音楽家・外山準氏と長野原町による、第1回「クラシック音楽の夕べ」開催。（この演奏会は現在まで続いている。）

1997（平成9）年8月　北軽井沢区主催、第1回「区民コンサート」開催。（法政大学村の作詞作曲家・寺島尚彦氏らが協力。）

1998（平成10）年5月　北軽井沢区主催、「区民大学」が開講する。（開講記念講演は谷川俊太郎氏。）

8月　「大学村七十年祭」が開かれる。（大江健三郎氏による講演、大江光氏によるコンサートなど。）

2005（平成17）年8月　ミュージックホール保存・改修のためのチャリティーコンサート開催。（チャールズ・ナイディックと大島文子さん夫妻。）

2006（平成18）年9月　「区民コンサート」が「秋いちばんコンサート」へ移行。寺島夕紗子氏らを中心にコンサートを継続する。長野原町が北軽井沢ミュージックホールの改修工事に着手する。

2007（平成19）年7月　ホールの維持・管理・運営を支えるために、北軽井沢ミュージックホールサポーターズが結成される。ミュージックホールの一部改修が終わり、リニューアルオープンする。

2017（平成29）年　「北軽井沢ミュージックホールフェスティバル」を開催。北軽井沢ミュージックホールは創立50周年を迎える。

ミュージックホールサポーターズのメンバー

北軽井沢ミュージックホール
群馬県吾妻郡長野原町北軽井沢 1988-74（北軽井沢交差点横）

きたかる別冊特集号　2017年9月発行
企画・編集・制作／きたかる編集部　発行／北軽井沢じねんびと　印刷／上毛新聞TRサービス
※「きたかる」ホームページ　http://kitakaru.me